

つながりを大切に

いすみ市立大原中学校養護教諭 ^{すずき}鈴木 ^{のりよ}教諭



1 ミドルリーダーとしての養護教諭？

令和2年度の千葉教育「菜号」学校歳時記において、千葉大学教育学部特任教授（現名誉教授）の天笠茂先生が、養護教諭をミドルリーダーと称し、「コロナ禍のカリキュラム・マネジメントとして、核となるミドルリーダーの下、チームによる教育課程の編成・実施・評価・改善が求められていることを確認しておきたい。」と執筆してくださっている。

「核となるミドルリーダー」の表記に、養護教諭としてうれしくも、身の引き締まる思いだ。まさに今、コロナ禍において養護教諭は、リーダーである校長の下、「チーム学校」の一員として専門性を発揮し、活躍が求められる時代となった。

2 縦のつながり

新型コロナウイルス感染症による休校期間を経て、学校が再開する頃の動きは慌ただしいものがあった。児童生徒の安心安全を確保し、文部科学省から出された「新しい生活様式」の下、実際の学校はどのように対応するべきか、そして誰が、どのように働きかけるべきか、養護教諭間でも議論が飛び交った。

新しいことをすぐに取り込み、実践している者もいれば、周囲の状況や自治体からの指示を待って、慎重に対応する者もいた。

幸い、私が勤務しているいすみ市では、コロナ対応の協議を行う校長会の場に、養護教諭の代表も参加し、意見を述べる機会を設けていただけた。これは、教育委員会の御理解があったからこそのことだった。学校が再開

されるときに、登校前の健康観察に始まり、三密の対策、給食、消毒、トイレ掃除、部活動、学校行事など全てが手探りの状態であった。地域差もあり、その対応は自治体に委ねられる部分があった。

文部科学省や県教育委員会から出される通知を読み返し、協議の場に臨んだ。発言に耳を傾けていただき、方向性が決まったときには責任の重さを実感するとともに、養護教諭の存在を大切に考えてくださっている市に感謝しなかった。

3 横のつながり

一人職として、休校明けに心がけたことは、市内の養護教諭が同一歩調でコロナ対応を行うことだった。

いすみ市は、小中学校合わせて12校で、養護教諭の年齢層は幅広い。そこで、市のパソコンのサーバー内に養護教諭共有のフォルダを作成し、互いに作った資料を紹介するよう心がけた。また、コロナに関する情報が更新されたときには、連絡網で流すことで、学校規模や校種、経験年数に左右されることなく、市内同一の対応をとることができた。

それらの専門性を活かした取組が、仕事をスムーズに進めるとともに、ひいては養護教諭全体の信頼を高めることにつながると考えられる。

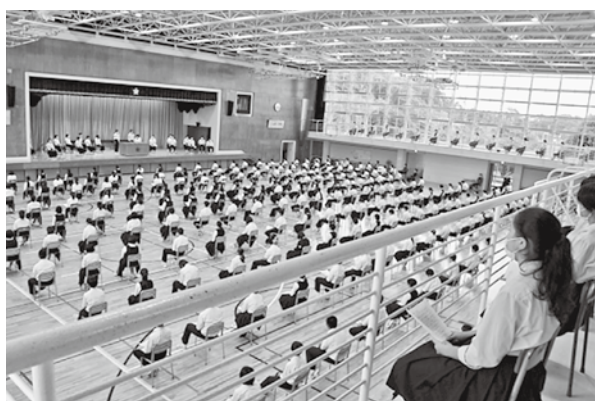
4 学校行事を通して

コロナ禍において、学校行事の在り方は変化した。流行の状況や地域の実情、校種や学

校規模の違いなどにより、例年当たり前に行っていた行事ができなくなった。

下は、令和2年度の生徒会立会演説会の際の写真である。凜とした空気を全校生徒に感じてもらいたいが、体育館の収容人数をどうするべきか。担当者はリモートなど3案程度考えた結果、間隔を開けて全校を入れた。

行事の立案の際に、担当者から相談されることがある。また、運営委員会や職員会議の際にも意見を求められることもある。



ときには外部機関と連絡を取り合い、調整をしながら、状況を判断し、進めることも求められる力の一つである。

5 養護教諭に求められる力

養護教諭は、「児童生徒の養護をつかさどる」教員として、「児童生徒の保健及び環境衛生の実態を的確に把握し、心身の健康に問題をもつ児童生徒の指導に当たるとともに、健康な児童生徒についても健康の増進に関する指導を行うこと」とされている。

社会の変化に伴い、子供たちの抱える問題も多様化し、養護教諭に求められるものは更に多くなってきている。健康診断はもちろんのこと、けがや病気の対応、感染症対策、生活習慣病予防、食物アレルギー、いじめ・虐待の早期発見、心の問題、コーディネート力など多岐にわたっている。最近、私が特に気になっているのは、心の問題である。

6 これからの時代に

長いマスク生活で相手の表情が分かりにくい。1・2年生においては、入学してからマスクを外した顔を見たことがない。不意にマスクを外されると、想像していた全体像との違いに驚くこともある。名前を覚えようとしても、顔の判別がわからずに覚えにくい。

コロナ禍で、「距離を空けなさい」「交わらない」「大声を出さない」など、人と関わることの逆を指導してきた。以前は「結束」や「ふれあい」で人とのつながりを大切にしてきた。その歪みが出始めた気がする。

最近、保健室利用で増えてきていることが「相談」。友達とのトラブルや、家族の生活が変化したことによる体調不良など、話を聞き始めると時間がかかるケースが多い。

本校はスクールカウンセラーが週1回程度で来校する。生徒の相談件数はここ数年では一番多くなっている。この調整を行うのも仕事の一つである。

現在の状況を考えると、今後さらに、学校現場にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門スタッフの配置が進むであろう。その場合は、専門職と協働するための協調性や、全体をコーディネートする必要性も実感している。

7 おわりに

養護教諭歴35年。田舎の小規模校では何でも屋の存在で、給食から園芸など、養護以外の校務分掌は当たり前であった。

しかし今、養護教諭は専門性を活かし「ミドルリーダー」として「チーム学校」の中で活躍を期待される時代となった。

「専門性に誇りと自信をもつ」そのためには、常に資質・力量を高めるための努力を怠らないように心したい。